

# ダウトゲーム

五十嵐貴久

第五回

17

翌日朝九時、志郎しろうは泉岳寺せんがくじ駅から都営浅草線に乗り、東銀座駅で降りた。昨晚遅く、鴨川かもがわから連絡があったので、住所はわかってい

た。  
築地方面つぎじへ向かって一キロほど歩くと、西築地二丁目の外れにスカイスクレイパーという五階建てのマンションがあった。

築年数は三十年以上だろう。古びた造りで、オートロックもなく、管理人もいなかった。

四階まで上がり、部屋のインターフォンを押すと、誰だ、というややかすれた声が返ってきた。

「北島忠二きたじまただじさんのお宅ですね？」

「そうだよ」

「警視庁の鴨川元警部補の紹介で来ました。品川桜署はしくちの橋口はしくちといいます」

「鴨川って、カモのことか？」低い笑い声をした。「そりやずいぶん

……あいつはまだ生きてんのか？」

「元気でやってますよ」

「あんたも刑事か？」

「本庁にいた頃、鴨川さんの下で働いていました」

「そうか……カモの紹介じゃ仕方ねえな。入んな。鍵は開いてる」

ドアを開けると、玄関に数足の靴があった。廊下の向こうから、

ワイシャツとスラックス姿の小柄な老人が顔を覗かせている。悪戯いたずら

好きな鼠ねずみのような目だった。

「こつちだ。来いよ」

リビングに入ると、テレビがつけっ放しになっていた。クイズ番組のようだ。

ポリウムがやや大きい。耳が遠くなっているのかもしれない。

七十歳ぐらいだと鴨川から聞いていたが、もう少し老ふけている感じがした。座れよ、と北島が椅子を指さした。

「一人暮らしだ。遠慮えんりよはいらねえ」

女房にようぼうが死んじまったからさ、と北島がテーブルの向かい側に腰を下ろした。

「五年前だ。あれ以来、お茶っ葉を買わなくなった。何も出せなくて悪いな」

「お構いなく。息子さんがいると聞きましたが」

「ヤクザの息子なんて知られたら、会社をクビになるってよ。十年前に縁を切られた」

「息子さんは、自衛隊員だったんですよね？」

「すぐ辞めちまったよ。居辛かったんだろう。おれの稼業を上官が知ったのかもしれないな。ヤクザになんかなるもんじゃねえ。つまらんよ」

北島が煙草たばこをくわえた。両切りのピースだ。

「刑事なんだな？ 何て言ったっけ？」

「橋口です」

「橋口刑事殿か……おれはさ、おまわりが嫌いだね。今じゃカタギなんだ。ほじくられるようなことは何もしてねえ。用件を話したら、さっさと帰ってくれ」

「北島建設について、聞かせてください」

唇を歪めた北島がピースの茶色い葉を吐き出した。

「馬鹿野郎が……北島建設？ おれの会社じゃねえか」

「あなたが経営から手を引いたのは知っています。今は片山興産に社名を変更してますね？」

「手を引いた？ 冗談じゃねえ、騙し取られたんだ」だま

「事情を話してもらえますか？」

「いいだろう。コーヒーでも飲むか？ おまわりは嫌いだが、今か

らでも何とかしてくれるなら、ブルマンでも何でも飲ませてやる」  
キッチンに入った北島がケトルに水を入れた。慎重な手つきでイ  
ンスタントコーヒーの瓶とカップを戸棚から取り出し、シンクに置  
いた。

「うちの組のことはカモから聞いてるんだろう？ 古いヤクザだよ。  
おれの親父は二代目でさ、ジイさんが戦争前だか後だかに作ったん  
だ」

「それは聞いてます」

親父の頃は羽振りがよかった、と北島がケトルをガス台にかけた。

「砥川組と手を結んで、他の組織を潰していった。おれはガキだ  
ったからよくわからんが、やりたい放題だったんじゃないのか？

昔の三多摩さんたまには、利権がいくらでも転がってただろうしな」

「でしようね」

「高度成長期だ。あの辺はどんどん開発されていった。土建業は組  
が始まった時からメインの事業で、どんだけ儲かったんだか」

北島がケトルに目をやり、さつさと沸わけよ、この野郎とつぶやい  
た。気が短いようだ。

ケトルが鳴り、ガスを止めた北島が薬剤を量る科学者のようにイ  
ンスタントコーヒーの粉をスプーンでカップに入れた。湯を注ぐと、  
コーヒーの香りが漂った。

親父はいいヤクザだった、と北島が口を開いた。

「頭が切れて、人望もあった。斬った張ったの話はあまり聞いたことがないが、いいヤクザにそんなものはいらねえよ。古いタイプだったかもしれないが、義理人情に篤くて組員にも慕われてた」

飲みな、とカップをテーブルに置いた北島が椅子に腰を下ろした。

「だが、父親としては最悪だよ。昔の人間だからすぐ手が出るんだ。

こつちも反抗して、商業高校を卒業するとすぐ家を出た。サラ金会社に勤めていたが、三十五の時に戻ってこいと連絡があった。親父は癌で、治る見込みはなかった。そんなこんなで家に帰り、そのまま組に入った」

「ずいぶん遠回りしましたね」

そうだな、と北島が顔を皺だらけにして笑った。

「その頃になると、組もうまくいかなくなってきた。倍々ゲームで儲かってた時代が終わり、社会の目って奴が厳しくなった。親父は古い男だから、うまく切り替えられなかったんだ。おれを組に入れたのは、サラ金の社員が長かったからでさ、そっち方面の知識はあったんだよ」

「それで？」

「いろいろ知恵を絞ったが、難しかったな。砥川組の代紋を見せりゃ、一発で事が決まるなんてこともなくなってたし、下手すりゃ速

捕されちまう。それじゃどうにもならねえ」

北島が独特の枯<sup>か</sup>れた声で言った。鳥のような声だ、と志郎は思った。

「親父が死んだのは、その三年ぐらい後だ。あの頃、ヤクザは世襲<sup>せしゅう</sup>が筋だったから、おれが三代目ってことになった。誰も頼んでねえよ、そんなこと。器量がねえのはわかってた」

しかも経歴が悪い、と北島が右の頬<sup>ほお</sup>だけを引きつらせて笑った。

「横入りでいきなり親分なんて、力のある奴は納得しねえよ。幹部連中がごっそり抜けて、別に組を構えたり、引退した奴もいた。それからはずっと小銭稼<sup>かせ</sup>ぎさ。ヤクザ映画でもそうだろ？ 新興<sup>しんこう</sup>の組が暴力や汚いシノギで元いた組を潰<sup>つぶ</sup>しにかかるんだ」

ヤクザ映画を観たことがなくて、と志郎は頭を搔<sup>か</sup>いた。若いから仕方ねえ、と北島がくわえ煙草で右膝を抱えた。

「平成に入った頃には、組員も縄張りも半分以下になってた。市議と組んで乗り切ろうと思ったんだが、十年ほど前にどうにもならなくな<sup>く</sup>なった。毎晩、金の計算だ。首でも括<sup>く</sup>ろうかって、何度思ったかわからねえよ」

志郎はコーヒーをひと口飲んだ。テレビから司会者が出題する声が流れている。

CSのクイズチャンネルだ、と北島が言った。

「他に楽しみがねえ。歳を取るつてのは、哀しいもんだよ」

「同情してほしいのか？」続きを聞かせろ、と志郎はカップを置いた。「それからどうなった？」

「言葉遣いが変わりやがったな。だからおまわりつてのは……どうしようもねえから、持ってた会社を切り売りすることにした。最後の砦とりでが北島建設だよ。あそこは経営もそこそこうまくいった。おれだって丸っきりのボンクラつてわけじゃない。北島建設だけに絞れば、どうにかやっていけるはずだった」

悔しそうに唇を歪めた北島に、株を買い占められたと聞いた、と志郎は言った。株式から土地や社屋まで丸ごと売れつて、訳のわからねえ連中が来た、と北島が鼻毛を抜いた。

「七年、いや八年前かな……間に入ったのは、若頭の門脇かじわきだった。無理しなけりや何とかなるから、俺は断った。だが、最初から門脇は連中と組んで、北島建設を乗っ取る気だったんだ。親父が生きてた頃から組の金をつまむような、ひでえ野郎でな。要するにお家乗っ取りだ」

「門脇ばいしゆうと買収を申し入れてきた連中が組んで、あんたを潰したのか？」

門脇はおれのハンコを勝手に売買契約書に押しやがった、と北島が吐き捨てた。

「会社名義で銀座の高級マンションを買ったから、そこで暮らしてください、こんないい話はないですよって、門脇の野郎が俺を追っ払った。江戸時代じゃねえんだぞ？ 所払いか？ 馬鹿にしやがって……訴訟沙汰になると面倒だから、おれを隠居いんきよさせたんだ」

門脇と組んでたのは誰なんだと尋ねた志郎に、よくわからんと北島が首を捻ひねった。

「気がついたら、株も全部奴らの物になってたんだ。不思議なもので、急に何もかも面倒臭くなってな。調べる気も起きなかったよ。後で闇金業者だと聞いたが、本当かどうかは知らねえ。ただ、金融のプロが係わっていたのは間違いねえ」

「なぜわかる？」

株式買い取りの処理が完璧だった、と北島がうなずいた。

「よほど切れる奴がいたんだろう。登記から何から、きれいに書き換えられていた。門脇が協力したのは確かだし、ハンコだって何だって持ってたから、できない話じゃねえが、あそこまで手抜きなくやるのはプロの仕事だよ。おれはずっとサラ金会社にいたから、その辺は詳しいんだ。正直、なかなかやるじゃねえかって思ったよ」

「そんなうまくやられたのか？」

「見事だったね。弁護士に確認させたが、法律上の手続きは完璧でどうにもならんとき。実を言やあ、おれも似たようなことをしてた

時期があった。慣れていても、どっかに漏れがあるもんだ。一流の  
仕事師がいたんだろう」

「その後は？」

「知らねえよ。もう、昔の付き合いはほとんどなくなった。ここで  
暮らして一年ぐらい経った頃、片山興産に社名を変えたと聞いたが、  
そんなことはどうでもいい話さ」

「どうしてその連中はあんたの会社に目をつけた？ おかしいと思  
わなかったか？」

おかしなことだらけだよ、と北島が新しい煙草をくわえた。

「最初から妙だった。門脇が連れてきたのは若い男で、社長だつて  
紹介された。話の流れで歳を聞いたら、四十とか言ってたが、そん  
なわけねえだろうって。どう見たって三十ちよぼちよぼだよ」

「社長にしては若いな」

名刺には何とかコーポレーション社長とあった、と北島が首を左  
右に曲げた。

「周りに何人か社員がいたが、そいつらも同じぐらいの歳でさ。一  
人だけ中年野郎がいたが、他はみんな若かったよ。最初のうちは真  
つ当な形で会社を買い上げようとしていた。具体的には十億円とか、  
金額も提示していた。三多摩の土建屋だつて、土地建物まで全部と  
なりゃあ、それぐらいにはなるさ。だが、あの若造は十万円を取り

引きみたいな面つらで話してた」

「ずいぶん慣れてるな」

「おれがヤクザなのもわかってたはずだが、びびったりもしていなかった。目付きが鋭くて、どこかの組員じゃねえかと思っただぐらいだ。迫力のある男だったよ」

「名前は？」

「何だったかなあ」この辺まで出てるんだが、と北島が喉元のどもとに手を当てた。「本当は売っても良かったんだ。十億円は妥当な額だからな。だが、北島建設で働いていた社員は要するに組員で、あの若造が社長になったら全員クビにするのがわかったから、断ったんだ。あっさり引き下がったが、そんなのは見せかけでな。門脇や古参の幹部に金を渡して、味方につけた。そうやって会社を乗っ取り、結局は幹部連中も裏切って切り捨てた。血も涙もないやり口だよ。ひでえ話だろ？」

「同情するよ」

「自分で言うのも何だが、おれは民主主義の親分だったんだ。会社をやったのも、若い連中を食わせていくためで——」

「門脇も捨てられたのか？」

「わかるわけねえだろ。立川でヤクザの看板を上げたのは聞いている。

あの頃、北島建設には百人ぐらい社員がいたが、十人ほどはそっち

へ行ったらしい。馬鹿が、門脇のところへ行つたつて、どうにもならねえよ」

「なぜだ？」

「平気で親を裏切る奴だぜ？ あんな男の下についたつて、ろくなこたあねえよ」北島の声に泣きが混じつた。「あいつは金のためなら、クスリだつて売春だつて何でもする。よその組ともしよっちゆう揉めてる。昭和じゃねえんだぞ？」

しばらく愚痴が続いたが、それ以上詳しいことはわからなかつた。また来る、と志郎は立ち上がった。

「何を調べてるんだ？」煙草をくゆらせながら北島が言った。「門脇もそうだが、片山興産に係わつたつてろくなことはねえぞ。年寄りの忠告は聞くもんだ。下手なことをすると……」

「そんなつもりはない」

じゃあな、と志郎は手を振つた。玄関で靴を履いていると、思い出した、という声が聞こえた。

「何だつて？」

名前だよ、と北島の声だけが聞こえた。

「おれの会社を乗っ取つた野郎だ。真田まなだとか言つたな」

助かるよとだけ言つて、志郎は部屋を出た。真田、とつぶやきが漏れた。

そのまま東京駅まで歩き、中央線で立川へ向かった。一時間近くかかったが、改札を抜けた目の前の交番に入り、品川桜署の橋口だと名乗った。

「門脇組の事務所はどこにある？」

何かあったんですか、と若い警察官が身構えながら言った。よほど面倒な連中のようだ。

教えられた駅前の大きな道路を北へ十分ほど歩いた。駅から離れると、昔風の飲食店が目についた。

住所を聞いていたので、スマホのナビに従い、いくつかの雑居ビルを見て回ると、一番奥にカドワキビルがあった。

一階のドアを押し開けて中に入ると、玄関脇に控えていた若い開襟シャツの男が立ち上がった。

警視庁の橋口だと名刺を渡し、門脇に話があると言うと、無言のまま奥へ入っていった。

すぐに太った背広姿の男が出てきて、品川の刑事さんが何の用です、と低い声で尋ねた。年齢は志郎と同じぐらいで、それなりに貫禄のある男だ。

「殺人事件の捜査だ」協力すればすぐ帰る、と志郎は言った。「断れ

ば面倒なことになるぞ。本庁の組対がお前らを潰しにかかる。損得がわかるなら、さっさと門脇に会わせろ」

「うちの組員が人を殺したってことですか？」

「そうじゃない。話を聞きたいだけだ。十分で帰るし、二度と来ない。お前、名前は？」

谷口ですと名乗った男が値踏みするように志郎を睨み、正面にあったデスクの電話でしばらく話していたが、構わないと社長がおっしゃってます、と受話器を置いた。

「こちらへどうぞ」

谷口が玄関脇の階段に足をかけた。

「このビルは買ったのか？ 新しいようだが、ずいぶん立派だな」  
安かったんですよ、とドアをノックした谷口が笑った。入れ、という野太い声に、そのままドアを開けた。二階全体がワンフロアになっただけで、かなり広い。

数人の男が手紙の宛名を書いていた。招待状でして、と谷口が唇だけで言った。

どうでもいいと首を振った志郎に、あちらですと谷口が奥を指さした。ソファセットに白いスーツ姿の五十代の男が座っていた。

唇の端に、刃物でつけられた傷がある。谷口が名刺を渡すと、品川桜署、と男が苦笑した。

「所轄しよかつの刑事が立川くんだりまで、何をしに来たんだ？」

声に不快な粘りねばがあった。砥川組の盃さかずきをもらったのか、と志郎は壁にかかっていた代紋を指さした。

「うまく話をつけたもんだ。砥川組は北島組を傘下に置いていたはずだが、筋違いでも通ったのか？」

詳しいな、と門脇が小鼻を搔いた。

「どこで聞いた？」

「北島本人だよ」

「オヤジは引退した。会ったのか？」まあいい、と門脇が向かいのソファに顎あごを向けた。「話があるなら、さっさと済ませてくれ。おまわりと話すのは苦手だね」

背後に目をやると、数人の男が睨にらみつけていた。わかりやすいヤクザだどつぶやいて、志郎はソファに腰を下ろした。

派手にやってるようだな、と志郎は辺りを見回した。

「何でシノいである？」

さあね、と門脇が肩をすくめた。昔の時代劇俳優のように整った顔立ちをしている。

「いろいろだよ。多角経営の時代だ。何でもやるさ。そうじゃなきゃ、食っていけない」

「そのいろいろが聞きたい」

「刑事に話すことは何もない」

殺人事件の捜査をしている、と志郎は顔を前に出した。わかったよ、と門脇が諦めたように両手を開いた。

「品川で殺しがあったのか？ 何で立川へ来た？」

「姫原村ひめはらむらの片山興産の社員が死んだ。あの会社とお前の組の関係を話してくれ。長居したくないし、されたくもないだろう？ さっさと済ませよう」

「昔は付き合いがあった」

七、八年前だ、と門脇が手を上げた。若い男が部屋に備え付けの冷蔵庫からビールを出してグラスに注いだ。

「昔の仲間にニワタコーポレーションって会社の役員を紹介されて、債権の取り立てを手伝った。ニワタは知ってるだろ？ 金融とパチンコでひと財産作った会社だ。今じゃ潰れちまったがね」

「それで？」

「北島建設を買収できないかって言ったのは、その役員だ。北島のオヤジに何を聞いたか知らんが、あの頃会社は相当ヤバかった。放っておいたら、二年と保もたなかっただろう。オヤジは人が良過ぎて、経営ができるタマじゃなかったんだ」

「続ける」

「北島建設が潰れたら、組は終わりだ。どっちにしても先はない。

だったら売った方がいい。そうだろ？ オヤジは俺を裏切り者扱いしてるようだが、そうじゃない。俺は組員のために泥を被ったんだよ」

「それで書類を書き換えたのか？ 勝手に印鑑をつけて、ニワタに株を売った？」

そんなことはしてねえ、とうんざりした顔で門脇が言った。

「調べりゃわかるが、あれは正当な商取引だった。北島建設は先代が作った株式会社で、株主はオヤジを含め幹部連中だった。俺がそいつらの株をまとめたり、オヤジの息子を説得して株式を売らせたりのしたのは本当だが、騙したわけじゃない。経営権を握ったニワタがオヤジを追い出したが、それは俺と関係ない」

「資金はニワタが用意したのか？」

「そうだ。あの頃は景気がよかったからな」

「買収にいくら使った？」

「知らんが、数億円じゃないか？ 建前は株式会社だから、辞めた社員には退職金も払った。奴らがまとまった金を手に入れたのは、俺のおかげだよ。オヤジに金を渡せなかったのは、会社に借金があったからだ。社長がケツを拭くのは当たり前じゃねえか。それが経営責任ってもんだろ？」

「最初はニワタの役員からの話だったんだな？ そいつは今どこに

「る？」

「知るかよ。友達じゃねえんだ」

「ニワタの社長と北島を会わせしたのはお前だな？　どんな男だ？」

「どんなって言われてもなあ……一度か二度しか会ってねえんだ。覚えてねえよ」

「名前は真田だったか？」

忘れちまった、と門脇がビールに口をつけた。嘘をついているのがわかったが、言っても認めないだろう。

「それからどうなった？　お前にはいくら入った？」

「手間賃だけだよ。俺が事務所を構えてからは会ってねえ。ニワタが倒産したのは、一、二年ぐらい後だった」

志郎は門脇を見つめた。全部が嘘とは思えない。事実を交えて話している。

だが、肝心なことは隠している。その理由がわからなかった。

確かめたいが、突っ込めるほどの材料を持っていない。無理に聞いても、はぐらかされるだけだ。

邪魔したな、と志郎は立ち上がった。帰るのか、と門脇が足を組み直した。

「谷口、刑事さんを下まで送ってやれ。丁重にな」

ビルの外に出るまで、谷口が背後についてきた。真夏の太陽がア

スファルトを照らしていた。

19

その足で立川にある警視庁第八方面本部へ向かった。本庁に勤務していた時の上司、寺尾てらお警部が第八方面本部に異動しているのは知っていた。

妹が殺された可能性があると詳しい事情を寺尾に説明すると、暴力組織対策課の植草つぎくさ警部補を紹介された。警察官同士の仲間意識は市民が思っているより遥かに強い。身内が殺されたと聞けば、情報提供に協力するのはどこでも同じだろう。

「門脇組は厄介でな」通された会議室で植草が口を開いた。「規模は大したことないが、面倒な連中が揃そろってる」

植草は大柄で、暴力団組員と言われても信じただろう。警察組織はソフイストケートされているが、暴力団担当の刑事は昔と変わらない。

「門脇と話しましたが、一癖も二癖もありそうな奴でしたね」

それ以上だ、と植草が渴いた笑いを漏らした。

「警察とのトラブルは避けたいから、協力的な姿勢を取っているが、信じたら馬鹿を見る。表向きは金融会社だが、舞台裏は酷いぞ」

門脇はまともじゃない、と植草が渋い表情になった。

「大学出で、会計士の資格を持つてるが、性格は凶暴そのものだ。今時、ああいうヤクザも珍しい。利権の拡大しか頭がないんだ。暴力、脅迫、何でもやる。この辺りは四つの組が共存してるが、どこにでも噛み付く」

「砥川組と繋がってるようですね」

「どう動いたのかわからんが、いつの間にか盃をもらっていた。砥川組としては東京進出の前線部隊ぐらいに思ってるんだろう。戦闘力が高いから、兵隊として使えるのは確かだ」

「金回りがいいようですが、それも砥川組の力ですか？」

「そこがわからん、と植草が唇を強く噛んだ。

「資金提供を受けているのか、はっきりしない。ただ、あんたも本庁にいたからわかるだろうが、めったに砥川組はそんなことをしない」

「では、どこから金を？」

「別に資金源があるんだろう。内偵を続けていたが、武器の密売に関わってるようだ」

「武器？ 拳銃の類ですか？」

北島組があった頃から、銃器類の闇取引は門脇が一手に引き受けていた、と植草が言った。

「北島に無断で、半グレ連中に銃を売っていたのはわかってる。組

が解散する直前、チンピラを大勢。ハクったこともあるんだ。だが、仕入れのルートがわからん。門脇の従兄弟がいる神奈川の神竜会しんりゆうかいが怪しいと俺は睨んでいるが、証拠がなくてな」

「それで？」

「七年前、稲城市にある米軍のサービス補助施設が襲撃されて、大量の銃器類が奪われた事件があった。犯人はわかっていないが、門脇が北島組から独立した直後で、どう考えたって奴が怪しい。令状を取って、門脇組のガサ入れをしたが、何も出てこなかった。こっちの動きに気づいて、別の場所に隠したんだろうが、よくわからん」

「半グレに拳銃をさばいてたというのは？」

半年前、オレオレ詐欺グループのアジトがわかって、うちの連中が逮捕に向かった、と植草が言った。

「もぬけの殻からだったが、十二丁の拳銃が置き捨ててあった。よほど慌てて逃げたんだろう。その半グレ連中が門脇組の下でオレオレ詐欺をやったのはわかってる。拳銃類を売ったのは、門脇組しか考えられん」

これは俺の勘だが、と植草が宙を見つめた。

「チャカ何丁とか、そういう話じゃない。もっと威力のある銃器を大量に動かしているはずだ。ただ、何のためかわからん。確かに、門脇組は武闘派で、どこの組とでも戦争する勢いだ。とはいえ、三

多摩のヤクザ相手にショットガンやマシンガンがいるか？」

「ショットガン？ マシンガン？ アメリカのマファイアですか？」

「他にもグレネードランチャーや火炎放射器、ダイナマイトやプラスチック爆弾まで揃えている、とタレコミがあった。半グレの一人を情報屋として使ってたんだ。そいつの話では、もっと本格的な装備も取り扱っていたらしい」

「本格的な装備？」

「詳しいことはわからん。情報屋も馬鹿でかい銃を見たと言ってるだけで、種類も不明だが、どうやら重機関銃や携帯型対戦車用の無反動砲、追撃砲の類らしい。革命でもやる気か？」

しかめ面のまま、植草が喉の奥で低い笑い声を上げた。

「他には？ 何かわかったことはないんですか？」

その情報屋が姿を消してな、と植草がため息をついた。

「正攻法で調べるしかないが、組員の口が固い。本庁に報告して、大掛かりなガサ入れをかけたが、何も見つからなかった。どこに隠しているのか……」

「情報屋は……消されたってことですか？」

「おそろくな。時間と手間はかかったが、先月の終わりにようやく目鼻がついた。門脇を逮捕するネタがある。何としてでも吐かせてやる。他の幹部も同時に逮捕しないと、また銃器類をどこかに移す

だろう。今はそっちの捜査を進めているところだ」

「他の組との抗争に備えてるんでしょうか？ 拳銃はわかりますが、他は武器ですよ？」

「まともなら必要ない、と植草がうなずいた。

「日本のヤクザの抗争なんて、チャカとヤツパで十分だよ。仮にだが、本家の砥川組と戦争をするつもりなら、武器類がなけりや話にならない。傘下一万人の広域指定暴力団だからな。本当にそれだけの装備があれば、砥川組にも勝てるかもしれん。小さな国の軍隊並みだからな。だが、門脇は馬鹿じゃない。砥川組との戦争に勝つても、結局は殺される。それがヤクザの掟だ。おきて。だいたい、ロケット砲を街中でぶつ放す気か？ そんなことをしたら、日本中の警察を敵に回すぞ。二十万人の警察官と戦って、勝てるわけがない」

「ガサ入れで見つからなかったのは、他の組に売ったからでは？」

「買うとすれば砥川組だけだが、そんな動きはない、と植草が肩をすくめた。

「わからないことはまだある。門脇は覚醒剤も扱ってる。近隣の大学生サークルにブツをさばかせてるんだ。この三年で二十人以上の馬鹿学生と門脇組のチンピラを捕まえたが、どこから覚醒剤を調達しているのか、それがわからない」

「調達——」

「初代組長の方針で、北島組はヤクを扱わなかった。だから、門脇にはルートがない。だが、奴は長期にわたって、しかも手広くやっている。確実に調達できるルートがあるはずなんだが――」

神竜会ですかと囁いた志郎に、そうとは思えん、と植草が首を振った。

「覚醒剤の調達ルートを知っている組員はいない。門脇が自分で動いているんだろう。調達したブツを組員に預け、それを大学生がさばく……その構図は確かだが、門脇がどこから覚醒剤を買っているのか、そこがわからないと話にならない」

「門脇が独立して組を構えたのは七年前だと聞きました。谷口という組員の口ぶりでは、雑居ビルを買ったようです。その資金はどうやって用意したんでしょう？」

「自前で持ってた金もあったはずだ。門脇は北島の下にいた時から、武器の密売の金をごまかしてたからな。あるいは、砥川組から借りたのか……何とも言えない」

「他の可能性は？」

「門脇はルートを持っていたから、銃器類を調達できた。それを担保に覚醒剤を手に入れ、売って資金にしたのかもしれない。銃器類は儲けも大きいが、需要が少ない。覚醒剤はいつだって買い手がいる。時間はかかるが、覚醒剤の方が金になりやすい。だが、どこか

ら買った？ 何年も続けているのに、情報がこつちに漏れてこないのはなぜだ？」

今話せるのはそれぐらいだ、と植草が立ち上がった。

「妹さんの件は残念だ……この話が役に立てばいいんだが」

差し出された手を志郎は握った。うなずいた植草が会議室を出て行った。

20

第八方面本部を出て立川駅に向かいながら、志郎はスマホをチェックした。着信一件、伝言一件。春野博美はるのひろみからだった。

『高村たかむらさんの件で、思い出したことがあります。また電話します』  
メッセージはそれだけだった。折り返し電話をかけたが、博美は出なかった。

橋口です、と志郎は留守電にメッセージを吹き込んだ。

「高村さんのことですが、どういったお話でしょうか？ こちらからも連絡しますが、いつでも電話ください」

駅までの道を速足で進んだが、博美の声が耳に残っていた。気になってナグー音楽事務所の番号を押すと、同じ部署の男性社員が出たが、春野は外出先から直帰するようです、と返事があった。

橋口から電話があったとお伝えくださいと言って、改札に入った。

ホームで中央線を待っている間、三分間で四回スマホを見たが、博美からの着信はなかった。

2 1

次の日の朝、泉岳寺のファストフード店でハンバーガーを食べながら、志郎はスマホで時間を確認した。八月二十七日木曜日、午前九時五十八分。

昨夜、春野博美の携帯に二回電話を入れたが、出ることはなかった。あまりしつこいと迷惑だと思い、それ以上連絡をするわけにはいかなかった。

スマホに着信履歴が残っているはずだが、なぜコールバックがないのか。電話をかけてきたのは博美で、高村のことが気になっていたのだろう。彼女は何を思い出したのか。

三十分前、ナグー音楽事務所に電話をかけると、十時出社予定ですと答えがあった。

アイスコーヒーを飲み終えてから、スマホに触れた。ナグー音楽事務所でございます、という若い女性の声が聞こえた。

「橋口と申しますが、春野さんはご出社されていますか？」

「申し訳ございません、出社が遅れているようです」

音楽事務所は普通の会社と違う。多少の遅刻は見逃されるのだろ

う。

「ですが、今日は春野が担当するイベントがありますので、間もなく出社するかと……昨日お電話いただいた橋口様ですね？ 出社次第、伝えますので……」

よろしくお願ひしますと言って、志郎は電話を切った。何かがおかしい、という予感があった。

博美の住所はわかっている。店を出て泉岳寺駅へ向かった。無意識のうちに、速足になっていた。

22

地下鉄とJRを乗り換えて新大久保駅に出た。コリアンタウンを抜け、職安通りに平行している細い道を十分ほど歩くと、大きな食品加工工場のすぐ脇にメゾン・スタデイというマンションがあった。玄関のポストで確認すると、博美の部屋は303号室だった。エレベーターで三階に上がり、部屋のチャイムを鳴らしたが、返事はなかった。

「春野さん、と志郎はドアをノックした。

「橋口です。いますか？」

スチールのドアが大きな音を立てたが、それだけだった。会社に向かった博美とすれ違いになったのか。試しにノブに手をかけて引

くと、ゆっくりドアが開いた。

「……春野さん？」

隙間から中を覗き込むと、玄関にミュールとパンプスが並んでいた。失礼しますと声をかけてから、玄関に足を踏み入れた。

「春野さん？ 橋口です」

短い廊下が目の前にある。右側に部屋があり、奥はリビングのようだ。

右側の部屋の扉を開くと、ベッドが目に入った。誰もいないのはすぐわかった。

そのままリビングへ向かい、ウッドドアを押し開けた手が止まった。手前の椅子が横倒しになっている。カーテンが半分ほどレールから外れているのも見えた。

ドアを大きく開け、視線を左右に向けた。キッチン壁にもたれかかるように、女が倒れていた。博美だ。

床一面に赤い染みが広がっているのに気づき、足を止めた。博美の腹部に大型のナイフが突き刺さっている。

赤い染みを踏まないように回り込み、常備している薄い手袋をはめて博美の肩に触れると、体が横に倒れた。顔に血の気はない。

首筋に手を当てたが脈はなく、呼吸もしていなかった。

手袋越しに、生々しい感触が残っている。博美の体はまだ温かか

った。

服や床の血痕も濁っていない。死後一時間も経っていないのだから。

背広の内ポケットからスマホを取り出し、番号を押した。はい警視庁です、という声が聞こえた。

「事件ですか、事故ですか？」

「人が……女性が殺されています。刺し殺されているようです」他に外傷がないか、目で確認しながら志郎は言った。「腹部をナイフで刺されています。それ以外はわかりません」

「被害者は女性ですか？ 名前は？ 住所はわかりますか？」

新大久保二丁目です、と志郎は住所を言った。

「メゾン・スタデイというマンションの303号室に住んでいる春野博美という女性です」

「すぐに手配します。あなたの名前は？」

窓の外で急ブレーキの音がした。外れていたカーテン越しに見ると、狭い路地に二台の車が停まっていた。

「もしもし？ 名前を教えてください」

前の車から降りてきた男が指示を出している。後ろの車の男たちが携帯を耳に当て、道路の様子を窺っていた。

どんな商売でも、同業者はわかるものだ。特に警察官はわかりや

すい。あの連中は刑事だ。

もう来たのか、と志郎はつぶやいた。早すぎる。

「……もしもし？ あなたの名前は？」

品川桜署刑事係の橋口巡査長、と志郎は名前と階級を言った。

「教えてほしいことがある。どうやってこの住所を伝えた？ 誰

と話した？」

「何のことですか？ 巡査長というのは本当ですか？」

四人の男がエレベーターに乗り込むのが見えた。志郎は通話を切り、部屋の外に出た。

あの四人が刑事なのは間違いないが、通報を受けて駆けつけたのではない。周りを見つめる険しい視線は、犯人確保に当たる刑事の目だ。

廊下の奥に非常階段があった。二階へ降り、外廊下から様子を伺っている、エレベーターを降りた男たちが303号室を指して走っていた。

橋口はどこだ、と刑事が携帯電話に向かって叫んでいる。ドアを開けた二人の男が部屋に飛び込んでいった。

「橋口！」

怒鳴り声に顔を上げると、三階の外廊下から若い男が身を乗り出していた。表情が殺気立っている。

志郎は二階の外廊下の手摺りから一階へ飛び降りた。猟犬の顔になっっている刑事に、事情を説明しても無駄なのは経験則でわかっていた。彼らは偽の情報を掴まされ、志郎を追っている。何を言っても信じないだろう。

まだ調べなければならぬことが山ほどある。今、捕まるわけにはいかない。

「待て！」

路地から飛び出した志郎の腰に、中年の男がしがみついた。その腕を振り払うと、勢いで男が倒れた。

反対側から、二人の背広の男が走ってくる。志郎はすぐ横にあった私道に入った。大きなポリバケツを蹴り倒し、前に出た。

こんな馬鹿なことがあるか。刑事が刑事に追われるなんて、笑話にもならない。

金網に飛びつき、乗り越えた。志郎は刑事で、犯人逮捕のための配置パターンはわかっていた。

マンションの位置、周囲の道路事情から考えれば、刑事は八人だ。博美の部屋に向かったのは四人、タックルを仕掛けてきた中年の刑事、背後にいる二人、もう一人は覆面パトカーで待機しているはずだ。それなら、裏をかけばいい。

細い道にいれば、いずれは追い詰められる。周辺の地図を頭に浮

かべる。大久保通りに出るしかない。

志郎は路地の奥にあった一軒家の庭に飛び込んだ。ガーデニングをしていた主婦が腰を抜かして座り込んだ。

すいませんと片手で拝んで、開いていた窓から家の中に入る。女が叫び声を上げたが、構わずそのまま玄関へ向かった。

ドアを押し開け、外に飛び出したが、段差で転倒した。右膝に激痛が走り、左手から血が垂れたが、構わず走りだした。大久保通りまで三百メートル。

左手から突っ込んできた車が前を塞いだ。覆面パトカーだ。

運転席の男がクラクションを鳴らしたが、志郎は車のボンネットを飛び越え、路地を走り続けた。

車がバックしてくる。タイヤがきしむ音と、怒声が重なった。

右手が大久保通りだ。十メートル走ると、大勢の通行人が行きかう交差点に出た。

数人のOLが突然飛び出してきた志郎を見て足を止めた。顔に怯えの色が浮かんでいる。

交差点の信号が赤になり、志郎は足を止めた。このまま新宿駅に向かうべきか。それとも通りを渡った方がいいのか。

大久保通りには数十台の車が走っていた。かなりのスピードだ。

背後で悲鳴が聞こえた。見なくても刑事たちが追っているのがわ

かった。

黒いカローラがすぐ横で停まり、降りてきた二人の男が志郎を指さした。新宿駅の方からも別の刑事が走ってくる。

志郎は車道に飛び出し、両手を広げて走っている車を強引に止めた。凄まじい勢いでクラクションが鳴り始めた。

大久保通りを渡ろうとしたが、振り切れないとわかり、志郎は足を止めた。動くな、と一人の刑事が叫んだ。

「こつちへ来い。逃げても無駄だ」

おれは品川桜署の橋口だ、と志郎は叫んだ。

「刑事係の藤元係長ふじもとに問い合わせれば、すぐにわかる」

志郎は左右に目をやった。六人の刑事に取り囲まれている。

「逃げてるわけじゃない。あんたらが追ってきたから……何があった？」

春野博美の件だ、と年かさの男が言った。

「事情を聞きたい。お前は重要参考人だ」

「重要参考人？ おれが行った時には、彼女は死んでいた。殺されてたんだ！」

「いいから来い。手間をかけさせるな」

男たちが近づいてくる。勝手にしろ、と叫ぶのと同時に、長いクラクションの音が聞こえた。

振り向くと、濃紺のミニクーパーが突っ込んできた。志郎の目の前で急停止する。

「乗って！」

助手席のオートウインドウが開き、運転席から叫ぶ声が聞こえた。女だ。

「早く！」

女がクラクションを叩く断続的な音が通りに響いた。志郎は頭から助手席の窓に飛び込んだ。

女がアクセルを踏み、ミニクーパーが急発進した。

狭い助手席で体勢を変え、後方に目をやると、数人の刑事が車道を走っていた。

「どういうことだ？」

無言のまま、女がハンドルを右に切った。遠心力でドアに頭からぶつかる。

横断歩道を渡っていたカップルの横をぎりぎり擦り抜け、更にスピードを上げた。

女の運転は下手だった。ハンドルさばきも怪しい。右、左と車線変更を繰り返しているが、勘だけでハンドルを切っていた。

信号無視、一時停止無視、一方通行逆走、スピード違反。あらゆる交通法規を無視して三十分以上走り、気づくと第一京浜に出ている

た。旗の台駅五分という標示板が見えたが、品川区に入っていた。

「大丈夫ですか？」

女が初めて口を開いた。声が震えている。スピードは四十キロまで落ちていた。

「何とか……あなたは？」

ハザードをつけて路肩に停まり、ハンドルに額を押し当てた女の唇から、ペーパードライバーなんです、とつぶやきが漏れた。

「免許を取ったのは十五年前で……この十年、運転したことはありません」

長い黒髪、痩せた横顔、黒のパンツスーツ。顔色が真っ白なのは、緊張のためだろう。

三十代前半ぐらいだろうか。美人だが、どこか神経質そうな感じがした。生真面目な女性教師、というイメージが志郎の頭に浮かんだ。

謎の美女に救われたってことですか、と女を落ち着かせるために、志郎はわざとおどけた口調で言った。そんなつもりはありません、と女が顔を向けた。

「ただ、橋口さんがヤクザに襲われていたので、助けよう……」

「ヤクザ？」

あの男たちです、と女が振り返った。

「十人近くいましたよね？ 橋口さんが刑事でも——」

あの連中はヤクザじゃない、と志郎は手を振った。

「ぼくと同じ、刑事です……待ってください、どうしてぼくが刑事だと？ 名前を知ってるのはなぜです？」

「あの人たちが刑事？」まさか、と女が目を丸くした。「だって、どこから見ても……」

「後で説明します。その前に、あなたのことを——」

「法務省の入国警備官、竹内たけうち有美ゆみです」

女がジャケットの内ポケットから身分証を出した。

「法務省？ 何がどうなってるのか——話してもらえますか？」

うなずいた有美がウインカーを出し、アクセルを踏んだ。午後十

二時、まだ陽は高かった。

(続く)